

血管・動脈硬化検査を受けられた方へ

血管・動脈硬化検査について、以下で説明させていただきます。

内臓脂肪CT、Lox-index®、血管年齢検査については、それぞれの検査結果表に説明がございますので、そちらをご参照ください。

頸動脈超音波について

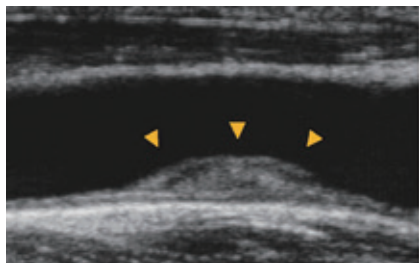
頸動脈は心臓から脳に血液を送る重要な血管で、頸動脈の動脈硬化が進行すると脳梗塞の原因となります。超音波で観察して頸動脈の壁の厚さから動脈硬化の程度を調べるとともに、全身の動脈硬化の進行具合を推察することができます。本検査では頸動脈で一番壁が厚い部位を計測していますので、一定以上の肥厚を認め精密検査・再検査の指示があった場合は総合的な評価を専門科で行うことがすすめられます。

正常な頸動脈の壁厚は 1.0mm 以下です。今回の計測でそれ以上の数値だった方は頸動脈硬化があると判断され、頸動脈だけでなく全身の動脈で同じような状況が生じている可能性が考えられます。

動脈硬化に強く影響する危険因子
高血圧、脂質代謝異常、糖代謝異常、喫煙、肥満等

今回の人間ドック・健診でこれらの項目に該当する場合は、医師の指示に従い生活習慣の改善や治療を行ってください。すでに内服加療中の方は主治医と相談しながら加療を続けてください。

また動脈硬化が進むと壁の内部に脂肪などが蓄積してプラークと呼ばれるものを形成します。このプラークが大きくなると血管内腔の狭窄が進行し、壊れると血栓ができて血液の流れをせき止めて脳梗塞の原因となります。大きなプラークや不安定型のものは壊れやすいので注意が必要です。



頸動脈プラークの例

* 矢印の部分が血管内腔に突出したプラークです

※ 受診者様の画像ではありません。

動脈硬化を調べる検査は頸動脈超音波以外にも眼底検査、頭部 MRI・MRA、血圧脈波検査（血管年齢検査）などがあります。これらはそれぞれ別の手法で動脈硬化を評価しており、検査結果が一致しない場合があります。今回いずれかの検査で動脈硬化を認めた方に限らず、異常がなかった方でも上記枠内の危険因子に該当する方は定期的に検査を受けてください。

高感度 CRP について

CRP はもともと炎症のマーカーで、風邪や肺炎などの感染症やリウマチなどさまざまな病気により体のどこかで炎症が生じると肝臓から産生されます。通常の CRP は基準値が 0.3mg/dl 以下とされていますが、本検査で測定する高感度 CRP では更に詳細に評価することが可能で、僅かな炎症の有無を調べることができます。

動脈硬化の進展には炎症が強く関係していることがわかっています。炎症が強ければそれだけ動脈硬化巣が不安定な状況になり、心筋梗塞や脳梗塞などにつながるプラークの破綻が生じやすくなります。つまり、高感度 CRP 値が高いと動脈硬化巣における炎症が強いため、将来心筋梗塞や脳梗塞を起こす確率が高くなると考えられます。

◎高感度 CRP の結果によって心筋梗塞や脳梗塞などの将来のリスクを分類することができます。

低リスク： 0.100 mg/dl 以下
中リスク： 0.101mg/dl 以上 0.300mg/dl 未満
高リスク： 0.300 mg/dl 以上

高リスクの人は低リスクの人に比べると、将来 2 ～ 3 倍心筋梗塞や脳梗塞を起こしやすくなります。

今回高感度 CRP 値が 0.300mg/dl 以上になった方で、頸動脈超音波等で動脈硬化を認めたり、ほかの動脈硬化危険因子を保有する人は特に注意が必要です。生活習慣の改善や経過観察、必要に応じて治療等を受けてください。なお高リスクの中でも 1.000mg/dl を超える場合は風邪などほかの原因による炎症を反映している可能性もありますので精密検査が必要です。医療機関を受診してご相談ください。

